

ジャーティ集団の接触と自己革新によって 低開発性の脱却を図る村・ダヒワディ

Emergence of Self-innovative Community and Its Impacts on Diverse Paths in Rural Development

南 埜 猛*・米田 巖**・藤原健蔵***・ダルウィ A.S. ****

Takeshi MINAMINO*, Iwao MAIDA**, Kenzo FUJIWARA*** and A.S. DALVI****

Abstract Authors have tried to follow up a recent trends in people's self development efforts and its impacts on rural dynamics in drought prone areas by taking up sample village, Dahiwadi, Shirur district, in Maharashtra state, which is situated outside the reach of command area on large scale irrigation project.

Unlike flourishig regions within the reach of well irrigated suburbanised front, the sample village is located at the valley head of small stream, connected by jeepable kacha road with adjacent major traffic network. Poorly maintained unpaved road has long kept village isolated and lagged behind in terms of socio-economic conditions. This small-sized village with population of 997, and households of 134 (1990) has suffered severely from unevenly distributed scanty rainfalls up to present time. Mainstay of economic activities have naturally tended to extensive rain-fed dry farming.

Dahiwadi is basically categorized as multi jati village, composing of 13 Hindu-castes and Muslim. However, before peopling by newly settled migrants, Maratha communities of 9 households in 1920, this village was nothing but poverty-stricken hamlet traditionally ruled by handful Brahmins, mainly depending on dry farming and shepherd.

Incoming of the self-innovative peoples, within which group has been internally tied up with the feeling of togetherness and mutual cooperation, have set spurt on intensive use of slope and upland by introducing various kind of commercial cash crops as onion and perennial tree crops as orange. A series of land reforms in 1950's and electrification of this village in 1980's acceralated acquisition of piecemeal land

* 広島大学大学院生； Post-graduate Student, Hiroshima University

** 広島大学総合科学部； Faculty of Integrated Arts and Seiences, Hiroshima University

*** 広島大学文学部； Faculty of Letters, Hiroshima University

****Department of Defence and Strategic Studies, University of Poona, Pune-411007, India

and enabled them to introduce technical innovations such as electric/diesel pumps and pipeline along with new farming practices, causing far reaching repercussive echoes among the native settlers. This suggests one of possible alternatives of self-development paths just less-favoured isolated village as Dahiwadi in drought prone areas.

目 次

| | |
|----------------|-------------------|
| I. 研究の視点 | 3. 就業構造 |
| II. 調査村の自然環境 | 4. 教育水準 |
| 1. 隔絶した箱型河谷の小村 | IV. 土地所有と農業革新への試み |
| 2. 頻発する干ばつ | 1. 土地所有 |
| III. 人口構造と社会集団 | 2. 灌漑の推進と換金作物の導入 |
| 1. 人口構造 | V. 新住民集団の自己革新と刺激 |
| 2. 社会集団 | 結論 |

1. 研究の視点

インドは独立後、村落開発計画（CDP, 1952年）にはじまる種々の農村ならびに農業の開発計画を進めた結果、1970年代の後半に念願の食糧の自給化を達成した。しかし、国内には交通不便な丘陵地域や干ばつが頻発する地域など、自然条件に恵まれない故に開発から取り残されている地域が数多く存在しており、パンジャブ州やハルヤーナー州などの先進的農業地域との間に広がりつつある経済格差の是正が国家的課題とされている。

本研究の目的は、自然的に不利な条件下にある農村の開発問題を考えるため、干ばつ常習地域にあり、かつ交通の不便な一農村を対象として、土地改革後の土地所有関係、農業経営、就業状態等の変化の分析を通して、農村社会の変化の実態を明らかにするところにある。

標本調査村として選定したのは、マハラシュトラ州プネ（Pune）県シルール（Shirur）郡ダヒワディ（Dahiwadi）村である。この村は長い間、土地の大半を所有し、ジャギルダール（jagirdar, 徴税官）をも務めていたブラーマン（Brahmin）地主によって支配され、そのもとで生活する多数のマラータ（Maratha, 伝統的生業は農耕）とダンガー（Dhanger, 伝統的生業は羊飼）の自小作民、および各種の職人・サービス層によって構成されていた、かなり自己完結型の性格の濃い村落であった。そうした地主支配村の中に1920年代にマラータ新住民が移住してきたが、彼らは村内に独特のバスティ（basti, 居住集団）を形成し、在来の旧住民とはかなり異なった行動をとっていた。本研究では、

南塾 猛 他：ジャーティ集団の接触と自己革新によって低開発性の脱却を図る村・ダヒワディ

マラータ新住民が独立後の土地改革などの外的諸条件の変化の中で、どのように農業開発に取り組んできたか、それが旧住民に対してどのような影響を与えているかについて、特に注目する。本村では、旧地主層に代わって村内指導層として活躍すべき旧住民の中農層の成長が遅れており、これを補完するかたちで行動するマラータ新住民の存在は重要である。

現地調査は、1990年12月に人口・職業・土地所有・家畜所有等に関する全戸悉皆調査（センサス調査）を行い、翌1991年10月に地稅（土地）台帳等からの土地所有・土地利用データの収集、農業経営に関する標本農家調査、灌漑ならびに土地整備の実態調査等を行った。全戸悉皆調査には、プーナ大学大学院生の協力を得た。

II. 調査村の自然環境

1. 箱型河谷内の隔絶村

ダヒワディ村は、マハラシュトラ州第2の都市プネ市の東北東約50kmに位置し、プネ県

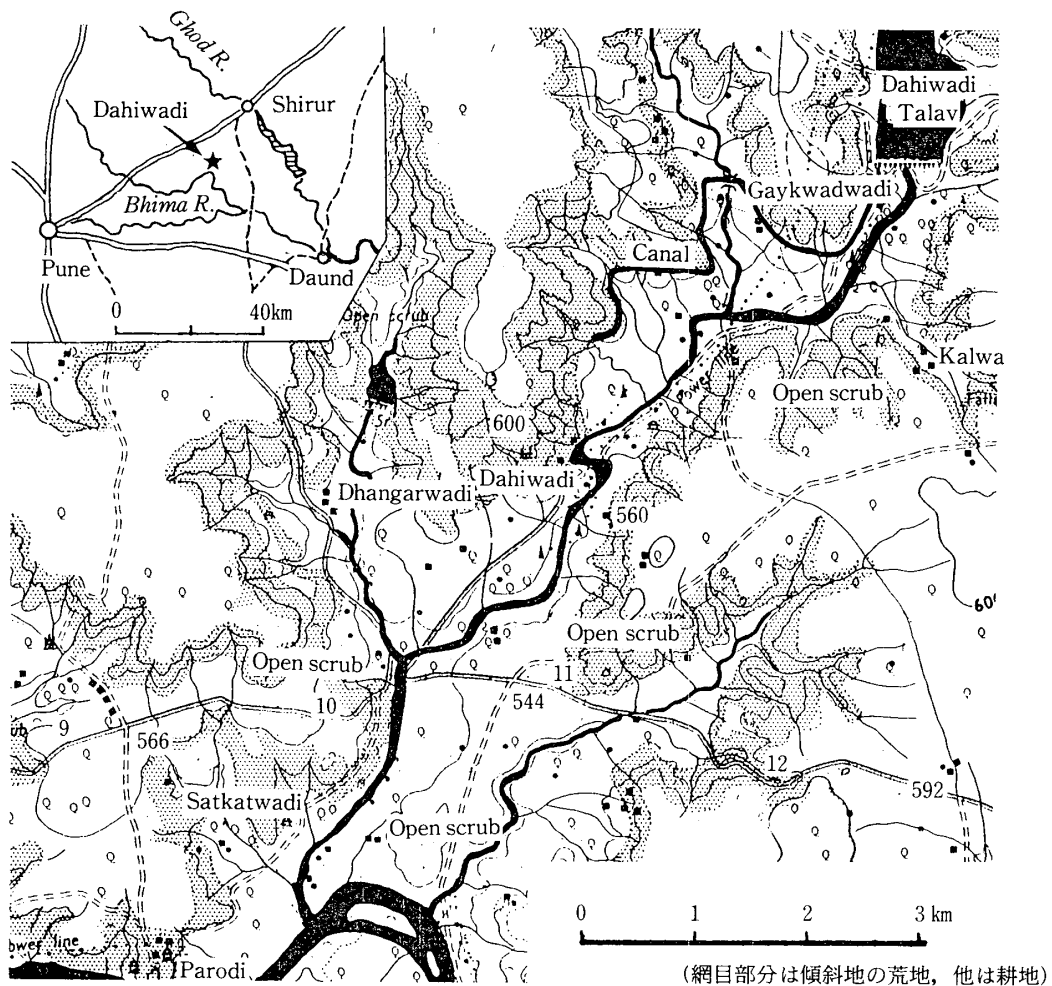


図1 ダヒワディ村の概観図
Fig. 1 Outline map of Dahiwadi

シルール郡に属する。シルールから村までは、国道ブネ=オーランガバードをブネ方向に約8km戻ったところで、未舗装の間道を南に入り、約15kmを進むと村の北端に到達する(図1)。しかし、この間道の整備はきわめて悪く、ジープでさえも1時間余りもかかり、雨が降ると川が増水して通行できなくなる。このため、村人は村の南部から東のナヴラ(Nhavra)に大きく迂回してからシルールへ北上する道路を利用する。こちらには一日に数回バスの便がある。このような道路整備の遅れのために、ダヒワディは周辺の町へのアクセスがきわめて悪い。

ダヒワディ村があるシルール郡一帯は、いわゆるデカン玄武岩層からなる地域であり、それが長い間の風化侵食によって形成された準平原地形が、標高600~650m前後に広く発達している。村域は、この準平原の台地面が南のビーマ川の谷の方へ緩やかに低下する一帯に広がり、その中央をダヒワディ川が北から南に向かって流れる(図1)。村域の形は羽子板状を呈し、東西約3km、南北約4.5km、総面積は1,016haである。準平原上にある北部の台地は620m以上の標高であるが、南東部では580m前後まで下がる。それを30~40mの深さで掘り下げたダヒワディ川の谷は、村の北半分では幅が狭いが、ビーマ川の谷に合流する南部ではやや幅広くなり、両側に低い河岸段丘も認められる。村名のダヒワディとは、dahi「箱」、wadi「小村、hamlet」の意で、古くからあった本集落はその名のごとく、箱型断面をもつダヒワディ川の谷底につくられた小さな村であった。

したがって、ダヒワディ村の地形は大きく3つの部分に分けられる。すなわち、標高580m以上にある平坦な台地面(準平原)、標高560m以下の谷底、そして両者の間にある傾斜地である。土壌は黒色土(kali, black soil)、灰黒色粗土(barad, coarse grey-black soil)、赤褐色土(tambdi, reddish black soil)に分けられる。台地面や傾斜地では土壌侵食によって表土が失われ、石礫混じりの浅い赤褐色土となっている。その中で比較的傾斜の小さい部分には、シルト質ローム~粘土質ロームの灰黒色粗土が発達し、石灰核を含ん

で粗粒・灰色になっている。黒色土は谷底の平坦な場所に発達する。こうした地形ならびに土壌条件に対応して、谷底ならびに台地面の大部分は耕地に利用されており、その面積は692.91ha、総面積の68.2%に相当する(表1)。耕地以外では可耕地が97.14ha(9.6%)、放牧地が27.24ha(2.7%)、荒地・河川敷が183.34ha(18.0%)、道路その他が

表1 ダヒワディ村の土地利用区分
Table 1 Landuse of Dahiwadi

| 土地利用区分 | 面積 (ha) | 割合 (%) |
|---------|---------|--------|
| 耕作地 | 692.91 | 68.2 |
| 季節的耕作地 | 94.84 | 9.3 |
| 可耕未可地 | 2.30 | 0.3 |
| 放牧地 | 27.24 | 2.7 |
| 荒地 | 150.33 | 14.8 |
| 河川敷 | 33.01 | 3.2 |
| 集落・寺院敷地 | 11.37 | 1.5 |
| 計 | 1012.00 | 100.0 |

15.17ha (1.5%) となっている。台地面と谷底との間にある傾斜地は、放牧地ならびに荒地として登記されている。なお、林地は存在しない。

2. 頻発する干ばつ

マハラシュトラ州の降水量分布は、西ガーツ山脈を境としてその東西で大きな違いがある。アラビア海から吹き込む南西モンスーンは、西ガーツ山地に衝突して風上側に年平均2,000~4,000mmの降水をもたらすが、風下側のデカン高原では1,000mm以下となり、山地を離れるにしたがい急速に少なくなるとともに、年による変動が大きくなる。ダヒワディ村では降水を観測していないため、シルールの観測データを代用してみると、年平均降水量はわずかに510.3mmである。その降り方は、南西モンスーンの到来初期の6月に年間の21%、おなじく後退期の9月に28%が降り、モンスーン季の5カ月のみで年間の85%に相当する435.6mmの降水がある(図2)。12月から翌年の5月までは乾燥季であり、保水力のある黒色土の土地以外は灌漑なしではラビ作物を栽培できない。また、モンスーン季5カ月の年々の降水も決して一様ではなく、年による変化がきわめて大きい。シルールの最近11年間(1980-1989)の6~11月の降水量をみると(表2)、もっとも多く降ったのは1982年の838.0mmであるのに対して、1985年および1986年はそれぞれ297.0mm、288.0mmと2年続きの大干ばつを記録している。さらに、1987年もカリフ作の播種直後の7月にほとんど雨が降らなかったため、農民達は前年からの干ばつ被害から立ち直ることができなかった(藤原, 1990)。干ばつには、このように7、8月の降雨不足で発生するケースも多いが、1983年のようにモンスーン到来が遅れて播種ができないばかりか、生長が遅れていた作物

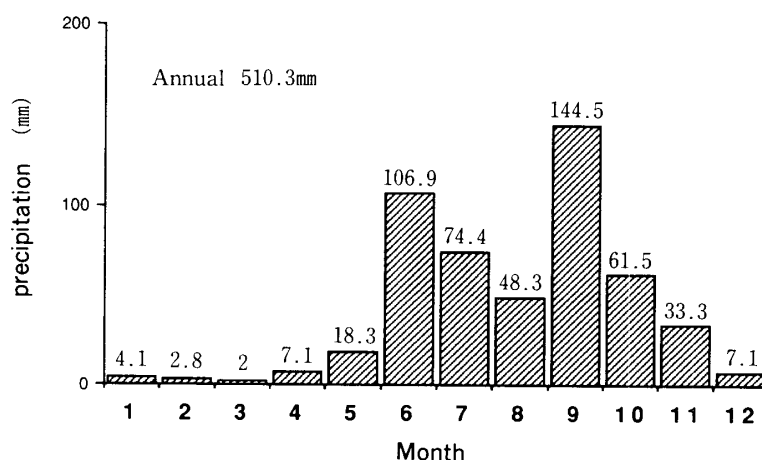


図2 マハラシュトラ州シルールの月別平均降水量
Fig. 2 Monthly precipitation of Shirur, Maharashtra

表2 1980～1990年間のモンスーン季の月別降水量
Table 2 Monthly precipitation in monsoon seasons, 1980～1990

| 年 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 計 |
|------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|
| 1980 | 192 | 33 | 125 | 178 | — | 67 | 595.0 |
| 1981 | 88 | 58 | 29 | 224 | 86 | 27 | 512.0 |
| 1982 | 93 | 28 | 142 | 215 | 280 | 80 | 838.0 |
| 1983 | 3 | 148 | 59 | 247 | 16 | — | 473.0 |
| 1984 | 71 | 129 | 1 | 128 | 96 | 18 | 443.0 |
| 1985 | 86 | 37 | — | 75 | 73 | 26 | 297.0 |
| 1986 | 142 | 22 | 16 | 108 | — | — | 288.0 |
| 1987 | 90.2 | 2.1 | 92.1 | 88.0 | 167.0 | — | 439.4 |
| 1988 | 91.3 | 43.4 | 21.5 | 400.0 | 11.0 | — | 567.2 |
| 1989 | 98.1 | 164.9 | 15.0 | 437.0 | 55.0 | — | 770.0 |
| 1990 | 73.0 | 42.0 | 100.5 | 24.2 | 133.8 | — | 373.5 |
| 平均 | 93.4 | 64.3 | 54.6 | 193.1 | 83.4 | 25.3 | 508.7 |

(シルール郡役所資料より、—は資料なし)

が十分に結実しないまま例年より早く雨季が終わってしまうケースもある。このように11年間の降水量の変動係数は0.34 (標準偏差179.4) と高い値を示しているが、干ばつ被害の様態は雨の降り方によってさまざまである¹⁾。

村の中央を流れるダヒワディ川は、その水源域が比較的厚い黒色土および風化土層におおわれているが、ほとんどは耕地化されて森林が残されていないために水分の地中保留が少なく、ダヒワディ川に流水をみるのは南西モンスーン季に限られ、11月以降は翌年の5月まで枯れ川となる。

III. 人口構造と社会集団

1. 人口構造

1990年に行った悉皆調査によると、ダヒワディの総世帯数は132、総人口は997人である。1世帯当りの人口は7.6人であり、この世帯規模はプネ県平均の6.8人より若干大きい。独立後の1951年以降、40年間における人口増加は97%にすぎない。これは全インドの同じ時期の約135%の増加に比較して低い値である。独立以来の人口変化をもう少し詳しくみると、1951年の507人、1961年の672人、1971年の657人、1981年の728人と推移しており、各10年間の人口増加率はそれぞれ32.5%、-2.2%、10.8%、36.9%である。独立後にかなりの人口増加があったものの、それにつづく1960年代および1970年代において減少ないし低い増加を記録しており、この村の発展に相当の遅れがあることを示す。図3は、ダヒワディ村を含むシルール郡中央部の町村の人口増加状況を1950年代と1960年代に分けて示したものである。これから解るように、1950年代には各村の人口増加に特別な傾向はないが、

南 埜 猛 他：ジャーティ集団の接触と自己革新によって低開発性の脱却を図る村・ダヒワディ

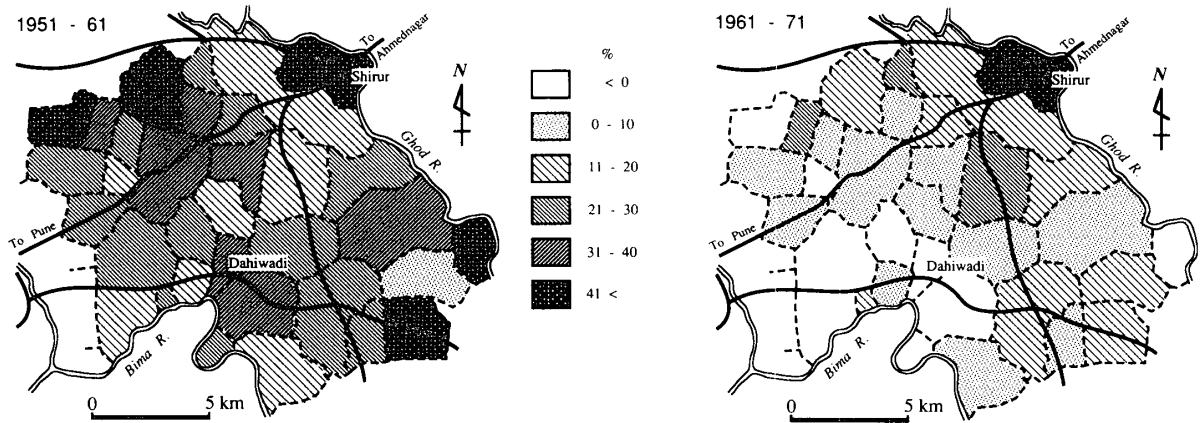


図3 シルール郡中央部の町村の人口増加率(1951~1961, 1961~1971)
 Fig. 3 Growth rate of population in the central part of shirur in 1951~61 and 1961~71

1960年代ではシルール町近くの村ほど増加し、遠隔村では人口がかえって減少している。この減少について確証はないが、この時期は土地改革後の混乱期に当たり、職を求めて転出した者が多かったのではないかと推定される。年齢階層別の人口をみると、20~24歳階層までは高出生率・高死亡率のピラミッド型となっているが、15~19歳階層以降は男女ともほとんど増加をみせていない(図4)。20~24歳階層以上については、高死亡率の他に前述した村外転出によって説明できるが、後者については家族計画の普及による出生率の低下が原因しているように思われる。なお、15~19歳階層では女子は婚出により、男子は就職・就学のために少なくなっている。

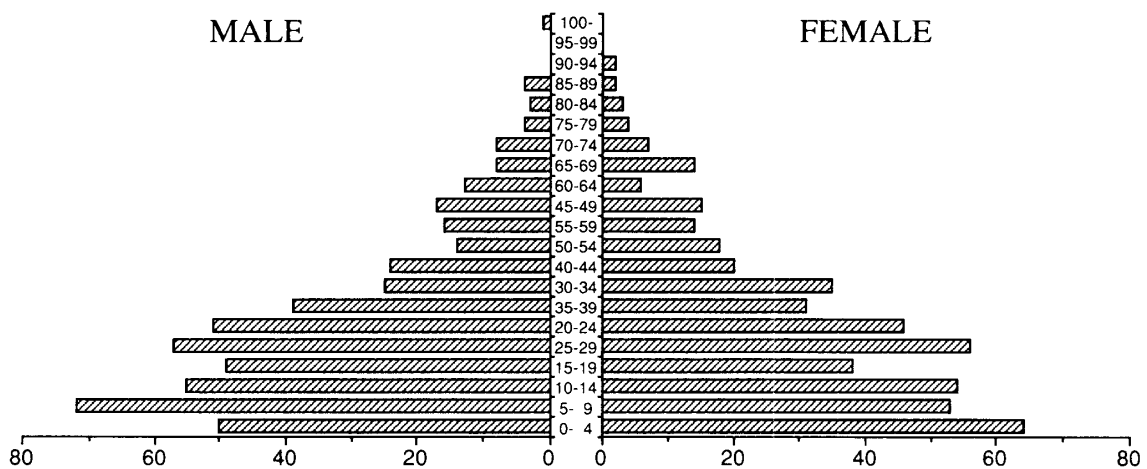


図4 ダヒワディ村の年齢別人口(1990年)
 Fig. 4 Population pyramid of Dahiwadi in 1990

2. 社会集団

表3はダヒワディ村のジャーティ別世帯数および人口構成である。13のヒンドゥー・ジャーティとムスリムからなる複合ジャーティ村落であるが、世帯数からいえば、マラータとダンガーの2大ジャーティによって特徴づけられている。すなわち、マラータが全体の55.3% (73世帯) を占め、これにダンガーの19.7% (26世帯) を合わせると、全体の75%におよぶ。かつて地主であったブラーマンは4世帯、ほかに大工・鍛冶・皮革職・ロープ作り・かご作り等の職人ジャーティや床屋・洗濯屋等のサービス・ジャーティが住んでいる。このように、村落規模はさほど大きくないが、職人・サービスのジャーティが各種揃っていること、および後述するように、現在もなお伝統的職業を維持している世帯が少なくないことは注目に値する。それは恐らく、この村が道路事情の悪さから他の村や町との依存関係が弱く、したがって、古くから完結型のジャジマニ制がつくられていたこと、また同じ理由から、伝統的職業への需要が今日もなお村内に残っているためと思われる。

この村の土地は元来、少数のブラーマンによって所有され、それを小作するマラータやダンガーが村のほぼ中央に集村をつくって住んでいた。それが現在の本集落（ゴウタン）であり、上記の各種職人・サービスのジャーティもそこに住んでいた。

ところが1920年代前半に、本村の東に隣接するウラルガオン (Uralgaon) からマラー

表3 ダヒワディ村のジャーティ別世帯および人口
Table 3 Households and population by Jati, Dahiwadi

| ジャーティ等 | 世帯数 (戸) | 人 口 (人) | | | | 伝統的生業 |
|------------------|------------|---------|-----|-----|-------|--------------------------|
| | | 男 | 女 | 計 | 割合(%) | |
| マラータ (Maratha) | 73 | 299 | 272 | 571 | 57.3 | 耕作, マハラシュトラ 州の主要ジャーティ |
| Local | 45 | 177 | 162 | 339 | 34.7 | |
| New comer | 28 | 122 | 110 | 232 | 23.7 | |
| ダンガー (Dhanger) | 26 | 107 | 93 | 200 | 20.1 | 山羊・羊の牧畜 |
| ブラーミン (Brahmin) | 4 | 11 | 14 | 25 | 2.5 | 司祭・書記等 |
| マタング (Matang) | 4 | 27 | 26 | 53 | 5.3 | ロープ作り |
| ジョシー (Joshi) | 3 | 17 | 12 | 29 | 2.9 | 魚取り |
| マハール (Mahar) | 5 | 13 | 13 | 26 | 2.6 | 皮革職 |
| スタール (Sutar) | 3 | 6 | 12 | 18 | 1.8 | 大工職 |
| ロハール (Lohar) | 3 | 7 | 9 | 16 | 1.6 | かじ職 |
| カイカディ (Kaikadi) | 1 | 6 | 6 | 12 | 1.2 | かご作り |
| チャマール (Chambhar) | 3 | 5 | 7 | 12 | 1.2 | 皮革職 |
| ドビー (Dobi) | 1 | 3 | 3 | 6 | 0.6 | 洗濯職 |
| バルバル (Barber) | 1 | 3 | 1 | 4 | 0.4 | 散髪職 |
| テリ (Teli) | 1 | 0 | 1 | 1 | 0.1 | 食用油の製造販売 |
| ムスリム (Muslim) | 4 | 14 | 10 | 24 | 2.4 | 商業・サービス |
| 合 計 | 132 | 518 | 479 | 997 | 100.0 | |

(1990年の全世帯悉皆調査より作成)

南埜 猛 他：ジャーティ集団の接触と自己革新によって低開発性の脱却を図る村・ダヒワディ

タの9世帯が移住してきた。彼らの故地はダヒワディ村から約65m離れたブネ県ケダ郡にあったが、1840年頃にウラルガオンに移っていた人たちである。2度にわたって移住した理由は、干ばつによる飢饉と農業経営の失敗にあったといわれるが、本村に移ってきた直接の契機は、当時、村の徴税官を務めていたデヴ家（ブラーマン）の土地が売りに出されていたためである²⁾。彼らは村の東北部にあるその土地を購入し、本集落から1km上流の谷底緩斜面に小さな集落をつくって移り住んだ。9つの世帯は、ビバレ・ダンカル・ガエゴッティの3つの系譜に属し、血縁関係はなかったが、ダンカルとガエゴッティは同じゴトラ（gotra）に属しているため、基本的には婚姻を結べない関係にあった。しかし、彼らは取得した土地を維持するためにも、また生活を維持するためにも相互の協力が必要であり、3つの系譜毎に一つのバスティを形成し、棟割長屋風の住居に住んでいる。現在では相互に婚姻もできるようになり、いっそう強固な地縁・血縁関係で結ばれている。

インドの伝統的村落では、ジャーティが社会集団の基本単位として集落内で居住分離していることが多いが、近年では盗賊等の危険がなくなったこともあって、自営農民が経営効率化のために農地に住居を移すケースが多くなった。そのため、村人の集団意識や行動を考えるには、従来の基準枠よりも多くの要素を取り入れて社会集団を設定してみる必要がある。図5は、複数の村民からの聞き取りにもとづいて作成したダヒワディ村の社会集団である。ジャーティのほかに居住地・出身地が重要な要素としてかかわっている。住民はまず大きく、もともとこの村に住んでいた旧住民集団と、1920年代前半に村外から移ってきた新住民集団に分けられる。旧住民集団はさらに二つに分けられ、以前からと同じく本集落に住み、伝統的な生活習慣を維持しているグループと、本集落から離れて自分の所有する耕地に散在して住む農家である。1990年現在では本集落に61世帯が住み、農業を営むマラータ・ダンガー・ブラーマン（前より順にA・B・Cグループと呼ぶ。合計32世帯）のほか、各種の職人やサービス・労務（農業労働者を含む）に従事するジャーティ（一括してDグループと呼ぶ。合計29世帯）からなる。本集落から離れて散居する農家は43を数えるが、そのうちの5世帯は最近10年間に本集落から移転してきた世帯である。そうした散居農家はマラータ・ダンガー・ブラーミンに限られ、マタング、マハールなどの職人・サービスのジャーティおよびムスリムはいない。それらを、ジャーティ・居住時期の違いによってE～Iに分けた。最後に、新集落のマラータ住民を一括してJグループと呼ぶことにする。

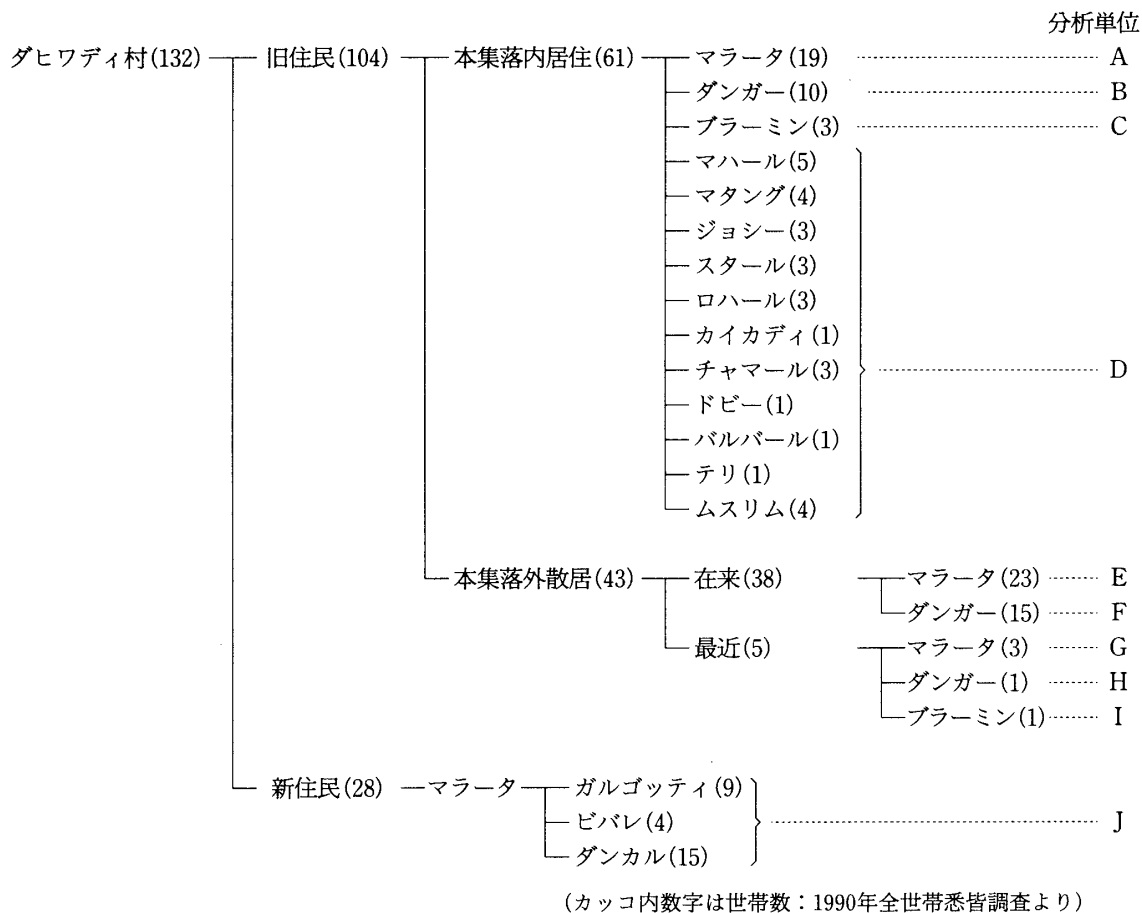


図5 ダヒワディ村の社会集団と分析単位
 Fig. 5 Social groups of Dahiwadi

3. 就業構造

ダヒワディ村のジャーティ別就業人口を、表4に示す。就業人口の総数は男子が293人、女子が269人である。男子就業者の職業別割合をみると³⁾、農業従事者(土地持ち)は58.7%、農業労働者(土地なしの農業従事者)は23.5%であり、合計すると全就業者の82.2%を占める。特に農業従事者の多いのはマラータとダンガーであり、それぞれの就業人口の67.1%、78.0%となっている。彼らの多くは土地改革によって土地を得た人たちであるが、後述するように所有規模は大きくはない。注目されるのはマラータが全就業者数の26.6%も農業労働者であることで、マラータの11.9%に比べてはなはだしく高率を示している。なお、農業労働者の66.7%がマラータであり、10.1%がダンガー、残る23.2%はジョシー・マハール・ドビー・ロハールおよびムスリムによって占められる。農業労働者の中には、耕作用の牡牛を有し土地を借りて、実際に農業の経営に当たっている者もいるが、今回の調査ではその実数を把握していない。伝統的生業が羊飼いであるダンガーの中で家畜飼育と答えたのはわずか1人である。

表 4 ダヒワディ村のジャーティ別就業人口
Table 4 Occupational population by Jati in Dahiwadi

| Jati | Agriculture | | A.Labors | | Livestock | | Service | | Industry | | Others | | Total | |
|----------|-------------|-----|----------|----|-----------|---|---------|---|----------|----|--------|---|---------|-----|
| | M | F | M | F | M | F | M | F | M | F | M | F | M | F |
| Maratha | 116 | 114 | 46 | 39 | 0 | 0 | 7 | 3 | 0 | 0 | 4 | 3 | 173 | 159 |
| Ordinary | 91 | 73 | 35 | 36 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 128 | 111 |
| Newcomer | 25 | 41 | 11 | 3 | 0 | 0 | 5 | 2 | 0 | 0 | 4 | 2 | 45 | 48 |
| Dhanger | 46 | 45 | 7 | 10 | 1 | 1 | 3 | 1 | 0 | 0 | 2 | 1 | 59 | 58 |
| Brahmin | 5 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 | 7 |
| Matang | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 2 | 12 | 9 | 3 | 3 | 20 | 14 |
| Joshi | 2 | 0 | 6 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 8 | 6 |
| Mahar | 1 | 0 | 5 | 6 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 | 6 |
| Sutar | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 6 | 0 |
| Lohar | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 2 | 3 |
| Kaikadi | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 2 | 0 | 0 | 3 | 3 |
| Chambhar | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| Dobi | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 |
| Barber | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 |
| Teli | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| Musulim | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 4 | 2 |
| Total | 172 | 166 | 69 | 67 | 1 | 1 | 19 | 9 | 21 | 14 | 11 | 8 | 293 | 269 |
| (%) | (58.7) | | (23.5) | | (0.4) | | (6.5) | | (7.2) | | (3.7) | | (100.0) | |

(1990年世帯悉皆調査より作成)

次に、農業以外の男子就業状況をジャーティ別にみると、ブラーマンの就業者総数8人の中の3人が家族を村に残したままプネ市等で教師・警官として働いている。職人・サービス業のジャーティの中で、なお伝統的生業を維持している例が意外に多い。すなわち、ロープ作りをするマタングは全就業者20人中の12人、大工のスタールは6人の全員、鍛冶職のロハールが2人（ただし女子のみ）、かご作りのカイカディは5人の全員、床屋のバルバルの1人がそれぞれの職業を継続しており、油販売人のテリは油以外の品物も扱っている。ただし、ドビーは洗濯業を営んでおらず農業労働者となっている。マタングの場合は例外的で、かれらは農業労働者ではなく、サービス業への進出、具体的には軍人・警官としてボンベイ・パンジャブなどで働いている。今日のインド農村では、交通の発達とそれに伴う都市からの生活物資の流入、教育の浸透、指定カーストへの職業保留制度などによって、これまで村落内で機能していた伝統的職人・サービス層の仕事が急速に減少している。この村のように、それらの仕事が現在もなお持続している例はめずらしい。これは前述したように、この村の隔絶性を示す一つの証拠ともいえよう。

村外就労についてみると、家族を村に残し村外で働いている者は34人に過ぎない。そのうちの半分がプネ市で就労しており、続いてボンベイの6人となっている。その他は、パンジャブ（2人）など村からかなり離れた地域で働く者もあるが、ほとんどはシルー

ルなど近くの町である。業種的には、一般労務のほか、先に述べたように軍人・警官・教師などの公務員や商業である。

以上のように、ダヒワディ村における就業構造の特徴は、農業（農業労働者を含む）への集中が第一にあげられるが、伝統的職業の継続も注目される。マトングのように世帯主または子供が村外に出て働くケースもあるが、ジョシーやマハールのように村内で農業労働者として働いている世帯が多く、労働力の外部への流出は全体として低い。これが最近10年間の人口増加の背景となっている。

4. 教育水準

1981年国勢調査によると、ダヒワディ村の識字者率は34.3%であり、インド全体の36.2%よりやや低い値となっている。男女別にみると男子は48.5%（インド全体46.9%）、女子は19.6%（同インド24.8%）である。表5は、全戸悉皆調査によって得た資料を、世代別、男女別に総括したものである。なお、ここで示した数字は、なんらかの教育を受けた者および現に教育を受けている者（以下就学者という）の総数であり、ほぼ国勢調査の識字者に相当する。また、世代を22歳以下と23歳以上に分けたのは、教育に対する村人の態度の変化をみるためである。

1990年現在の村全体の就学者率（就学年齢に達していない者を除く）は、54.7%であり、1981年の識字者率と単純比較すると、20.4%の上昇を示す（表5）。世代別にみると、23歳以上では35.4%でしかないのに対して、22歳以下では80.1%と大幅に向上しており、教育が急速に普及していることを物語っている。教育水準の急速な向上の背景には、特に新集落に小学校が新設されたことがある。この教育の普及進度を22歳以下の就学者の男女別でみると、男子が93.1%であるのに対して、女子は64.2%である。後者の数値を23歳以上の就学者率19.5%に比較すると3倍以上の上昇となっているが、教育水準の男女間格差はいぜん大きい。数字の上では、男子のほとんどが教育を受けていることになっている。実際に登校している人数はこれよりかなり少ないが、近年、村民が教育へ関心を高めている

表5 ダヒワディ村における就学者率の上昇
Table 5 Increase of literacy rate in Dahiwadi

| 世 代 | 1981 | | | 1990 | | |
|-------|------|------|------|------|------|------|
| | 男 | 女 | 平均 | 男 | 女 | 平均 |
| 22歳以下 | | | | 93.1 | 64.2 | 80.1 |
| 23歳以上 | | | | 50.0 | 19.5 | 35.4 |
| 全 体 | 48.5 | 19.6 | 34.3 | 69.2 | 38.1 | 54.7 |

1981年は国勢調査の識字者率、1990年は全世帯悉皆調査の就学者率

南埜 猛 他：ジャーティ集団の接触と自己革新によって低開発性の脱却を図る村・ダヒワディ

ことは事実である。

次にジャーティ別の就学状況をみると、高校以上の就学者はマラータ60人（12.3%：ジャーティ内の就学年齢到達人口に対する割合）、ダンガー9人（5.3%）、マタング8人（4.2%）、マハール2人（8.7%）、ブラーマン12人（57.1%）、チャマール1人（8.3%）、バルバル1人（25.0%）、そしてムスリム6人（26.1%）となっている。ブラーマンが他のジャーティに比して格段に高い値を示し、これが教師・会社員など都市で有利な職を得ることを可能にしている。ムスリムも高い割合を示している。以前には新集落に小学校がなく、1km余りの道のりを本集落の小学校に通わせなければならなかった。そのため、新集落のマラータ住民は小学校の新設を村パンチャーヤトに要請していたが、村意がまとまらないために実現しなかった。そこで、彼ら自身が建設費を立て替えて校舎を建設し、1988年より新集落出身の教師を招いて子女の教育に当たらせている。新集落のマラータの中にはサービスや一般労務についている者が多いのに気付く。その多くは村外で働いている。新集落住民は村内で農業経営に熱心に取り組むとともに、その限界を熟知して、子弟を村外で就職させるため教育を受けさせているものと思われる。これに対して、同じ農業就業者の多いダンガーには教育への期待が低いのか、あるいは経済的余裕がないためか、就学者率はきわめて低い。

職人・サービス業のジャーティで高校以上の学歴を有する者は、23歳以上の世代ではマタング・マハールに限られていたが、22歳以下の若い世代になるとジョシー・チャマール・バルバルにもみられるようになる。これは指定カーストに対する就学の保留制度の効果と思われ、さらに将来は軍人・警官等の公務員職への就業に連なるものといえよう。

IV. 土地所有と農業発展への努力

1. 土地所有の変化

ダヒワディ村の土地所有は、1950年代後半の土地改革によって大きく変化した。土地の大部分を所有し、ジャギルダール（徴税官）も務めていたデヴー族（ブラーマン）は、その多くを小作人に手放さざるを得なかった。一族の中には、経済基盤を非農業部門に求めてプネ市に転出した世帯もいる。村に残ったブラーマン旧地主も、土地所有の上限設定によって1世帯50エーカー（約20ha）以内に制限された⁴⁾。

表6は1990年の悉皆調査によるジャーティ別の耕地所有状況である。村人が所有している耕地の合計は491.05haであり⁵⁾、その内訳は灌漑地33.8%、非灌漑地65.4%、樹園地0.8%の割合になっている。ブラーマン世帯が所有する耕地は55.8ha（耕地総面積の11.4%）まで減っている。しかし、これを所有するのは4世帯だけであり、1世帯平均にすれ

表6 ダヒワディ村のジャーティ別土地所有
Table 6 Landholdings by Jati in Dahiwadi

| Jati | Irrigated | | Un-irrigated | | Garden (ha) | Total | | Per Household |
|-------------------|------------------|-------|------------------|-------|----------------|-------------------|-------|------------------|
| | (ha) | (%) | (ha) | (%) | | (ha) | (%) | |
| Maratha | 88.25 | 53.3 | 198.30 | 61.7 | 4.02 | 290.575 | 59.2 | 4.0 |
| Loacal | 44.16 | 26.7 | 109.87 | 34.2 | 1.62 | 159.650 | 32.5 | 3.5 |
| New comer | 44.09 | 26.6 | 84.43 | 26.3 | 2.40 | 130.925 | 26.7 | 4.7 |
| Dhanger | 30.16 | 33.4 | 38.19 | 21.2 | 0.00 | 68.35 | 15.7 | 4.2 |
| Brahmin | 19.00 | 11.5 | 36.80 | 11.5 | 0.00 | 55.800 | 11.4 | 14.0 |
| Matang | 1.06 | 0.6 | 5.06 | 1.6 | 0.00 | 6.120 | 1.2 | 1.5 |
| Joshi | 0.20 | 0.1 | 1.40 | 0.4 | 0.00 | 1.600 | 0.3 | 0.5 |
| Mahar | 0.00 | — | 10.60 | 3.3 | 0.00 | 10.600 | 2.2 | 2.7 |
| Sutar | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.000 | 0.0 | 0.0 |
| Lohar | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.000 | 0.0 | 0.0 |
| Kaikadi | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.000 | 0.0 | 0.0 |
| Chambhar | 1.37 | 0.8 | 0.40 | 0.1 | 0.00 | 1.770 | 0.4 | 1.8 |
| Dobi | 0.40 | 0.3 | 0.40 | 0.1 | 0.00 | 0.800 | 0.2 | 0.8 |
| Barber | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.000 | 0.0 | 0.0 |
| Telee | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.0 | 0.00 | 0.000 | 0.0 | 0.0 |
| Musulim | 0.00 | 0.0 | 0.35 | 0.1 | 0.00 | 0.350 | 0.1 | 0.1 |
| Total (ha) (%) | 140.44 (33.8) | 100.0 | 291.50 (65.4) | 100.0 | 4.02 (0.8) | 435.96 (100.0) | 100.0 | 3.7 |

(1990年全世帯悉皆調査より作成)

ば14.0ha となり、他のジャーティに比べて依然として飛び抜けて大きい。図6は、土地台帳に登録されている土地所有者の中から比較的大きな面積を有している者の地片を地籍図に記入したものである。土地台帳の上では、ブラーマンの耕地は8人の名義となっているが、内情は同一世帯の親子が別々に所有していたり、都市在住の弟の分を在村の兄が経営していたり、さまざまである。デヴ一族の所有地は村の北部に集中しているが、個々の地片は谷底や台地上に分散しており、土地解放の際に優良地のみを温存・占有したとはいえないようである(図6)。もう一つのブラーマン(デカーネ家)は、村の中央に比較的肥沃な土地を兄弟二人で所有している。

ブラーマンに代わって村の農地の大半を所有するようになったのがマラータである。その所有する面積は290.575haであり、耕地総面積の59.2%に当たる。マラータ全体の1世帯平均の所有は4.0haであるが、新集落のマラータ(社会集団のJグループ)に限ってみると平均4.7haであり、かつ各戸の所有に大差がない。彼らの土地は村の北東部に集中しており、地籍の細分化がいちじるしい(図6)。本集落から離れて散居するマラータ(Eグループ)の、ある一族が所有する土地を図6に示す。もともと1世帯で所有していた土地を相続分筆によって細分化し、土地台帳の上では現在5人の所有になっている。しかし、一つの地片(地籍番号)が分筆されずに複数人の名義になっているケースも多く、実際に

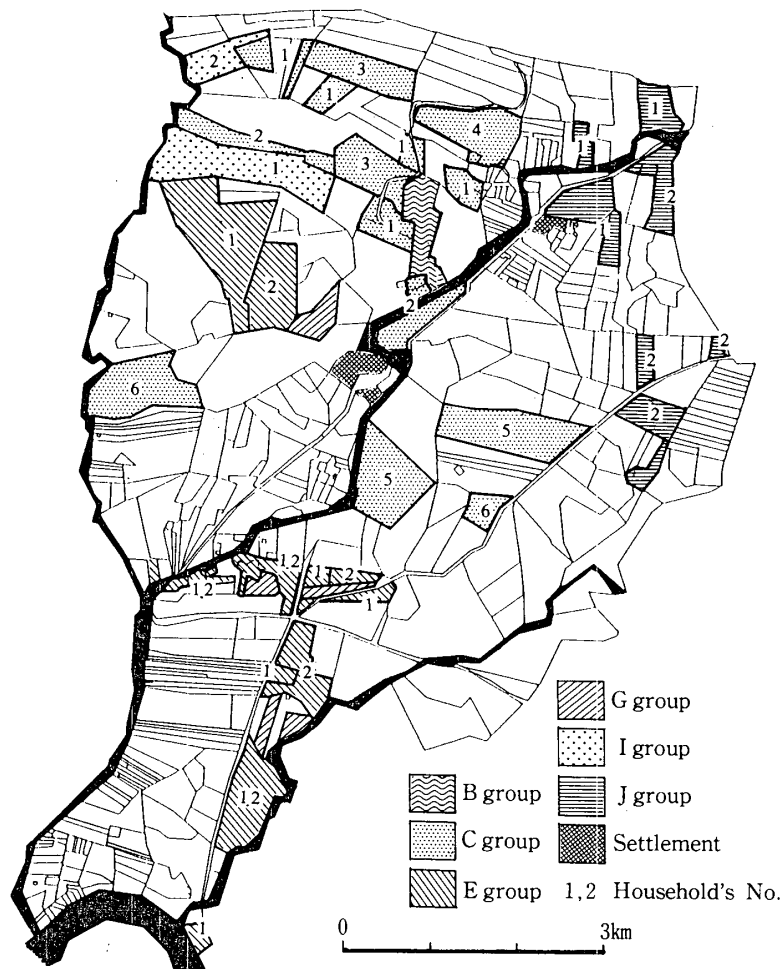


図6 社会集団別に見た土地所有上位世帯の土地分布
 Fig. 6 Farm distribution of large landholders by social group in Dahiwdi

も灌漑・耕作等で共同経営をしている部分はかなり認められる。土地を所有しているダンガーは15世帯おり、耕地総面積の15.7%に当たる68.35haを所有している。1世帯当りの所有規模は4.2haであり、Jグループに近い平均規模となっている。最大の所有規模は8haであり、Jグループと同様に際だって大きな土地を持つ農家はいない。15世帯の中の11世帯が、以前から本集落から離れて散居していた農家（Fグループ）であり、土地改革によって手にした旧小作地に住んでいる。以上、3ジャーティによって所有されている面積は耕地総面積の95.1%に達している。他では非灌漑地を所有するマハールの4世帯が目立つにすぎない。

つぎに、規模別の土地所有状況を見ると、土地を全く持たない世帯47（全体の35.6%）、1.0ha未満所有の限界農10世帯（7.6%）が存在する（表7）。これに1.0～3.5haの小規模農の33世帯（25.0%）を加えると、この村では干ばつ常習地域計画や農村総合開発計画

図7 ダヒワディ村におけるジャーティ別土地所有規模

Table 7 Landholding size by Jati in Dahiwadi

| Jati | Landless | Marginal (Below 1) | Small (1~2) | Semi-medium (2~4) | Medium (4~10) | Large (10&more) | Total |
|----------|----------|-----------------------|----------------|----------------------|------------------|--------------------|-------|
| Maratha | 15 | 8 | 13 | 14 | 12 | 10 | 73 |
| Ordinary | 13 | 4 | 10 | 7 | 5 | 6 | 45 |
| Newcomer | 2 | 4 | 4 | 7 | 7 | 4 | 28 |
| Dhanger | 11 | 0 | 3 | 3 | 9 | 0 | 26 |
| Brahmin | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 4 |
| Matang | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 4 |
| Joshj | 2 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| Mahar | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 5 |
| Others | 15 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 17 |
| Total | 47 | 10 | 20 | 18 | 23 | 14 | 132 |
| (%) | (35.6) | (7.6) | (15.2) | (13.6) | (17.4) | (19.6) | (100) |

(1990年全世帯悉皆調査より作成, 土地規模の単位は ha)

表8 ダヒワディ村におけるジャーティ別の灌漑耕地所有規模

Table 8 Holding size of irrigated land by Jati in Dahiwadi

| Jati | Landless | Below 0.5 | 0.5~1.2 | 1.2~2.5 | 2.5 & more | Total |
|----------|----------|-----------|---------|---------|------------|-------|
| Maratha | 25 | 11 | 14 | 12 | 11 | 73 |
| Ordinary | 19 | 6 | 7 | 10 | 3 | 45 |
| Newcomer | 6 | 5 | 7 | 2 | 8 | 28 |
| Dhanger | 11 | 2 | 5 | 4 | 4 | 26 |
| Brahmin | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 4 |
| Matang | 3 | 0 | 1 | 0 | 0 | 4 |
| Joshj | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| Mahar | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 5 |
| Others | 16 | 0 | 0 | 1 | 0 | 17 |
| Total | 62 | 14 | 20 | 17 | 19 | 132 |
| (%) | (47.0) | (10.5) | (15.2) | (12.9) | (14.4) | (100) |

(1990年全世帯悉皆調査より作成, 土地規模の単位は ha)

の対象となる世帯が、実に68.9%を占めていることになる⁶⁾。土地を全く所有しない世帯が目立つのは、鍛冶職などの非農業的職業の世帯が多いためであるが、ダンガーの中に山羊・羊の飼育に依存している世帯が多いためでもある。経営的にも自立できるとみられる中規模農および大規模農はブラーマン・マラータ・ダンガーの3ジャーティに限られ、全体の31.9%にすぎない。灌漑地だけを取り出してみても、ほぼ同じ傾向がみられる(表8)。

以上を要約すると、土地所有関係からみたダヒワディ村の社会構造は、少数のブラーマン地主、少数のマラータ自作農、多数のダンガー・マラータ小作人、多種の職人・サービス職からなっていた従来の図式が土地改革によって解体し、新たに土地を得たマラー

南塾 猛 他：ジャーティ集団の接触と自己革新によって低開発性の脱却を図る村・ダヒワディ

タ・ダンガーの中規模農および大部分の土地を喪失したものの上限近くまで土地を確保したブラーマン世帯に切り替わった。しかし同時に、きわめて零細規模の農民層および土地を全く所有できない階層を多数輩出することになり、二つの分極化が進行している。

2. 灌漑耕地の拡大

表8から知られたように、ブラーマンは多くの土地を失ったとはいえ、灌漑耕地を多く所有している。しかも、そのほとんどは溪流灌漑に容易な谷底部にある肥沃地である。一方、新集落のマラータ住民も広い灌漑耕地をもっている。しかし、その多くは谷底部ではなく、灌漑の困難な斜面部または台地の上にある（図6）。彼らはこれまで、条件の悪いそれらの土地を非常な努力を重ねて灌漑耕地に変えてきたのである。そうした開発への旺盛な意欲と努力が、この村の発展に少なからず反映されている。つぎに、その経過をたどってみることにする。

ダヒワディ村では、古くから狭い谷底部で溪流および井戸を水源とする灌漑によって、モロコシ (jowar) ・トウジンビエ (bajra) などが栽培されていた。一方、それより40mほど高い台地面では天水によって耐乾種のモロコシ・トウジンビエなどが栽培され、また台地面と谷底の間の傾斜地では、ダンガーによって羊・山羊の放牧が行われていた。独立後の農村開発の一環として、1960年代に政府の小規模灌漑事業によってダヒワディ川の上流に同名の貯水池が築造され、そこから水を引く用水路によって右岸低地の耕地が灌漑されるようになった（図1）。しかし、現在は堰堤の漏水のために貯水池に水がなく、用水路は機能していない。なぜ補修して利用しないかについては、明かではない⁷⁾。ただし、この貯水池は不完全ではあるが、モンスーン季には出水を一時的にせき止めて、ダヒワディ川の流況を良くしていることは確かである。

一方、新集落マラータ農民（Jグループ）の所有する土地は、一般にダヒワディ川から水路によって直接水を引くことができない高さにある。ところが1970年前後から、この斜面耕地を灌漑するため谷底部に井戸を掘り、ディーゼルポンプによって耕地まで揚水しようとする農民がでてきた。これには、彼らの中でも特にガエゴティの人々が熱心であったといわれる。彼らには以前に、ジャージー種の乳牛を導入し生乳の出荷を試みたが、集乳場所の国道までの道路が悪いために生乳を腐らせてしまい、失敗した苦い経験がある。彼らはこの経験を生かして、灌漑耕地の新しい換金作物として保存のきくタマネギを1982年から、レモンを1984年から導入した。そのために相当の初期投資を行いながら、それまで耕されていなかった傾斜地に耕地を築き、揚水灌漑をおこなっている。これが成功したため、彼ら以外の村人にも揚水灌漑とタマネギ栽培が普及している。つぎに、その経過をも

もう少し詳しくみることにしよう。

ダヒワディ村では古くから灌漑井戸が掘られていたが、その数はここ20年の間に急激に増加し、現在、65個あるとされている。実際に確認できた58個の井戸を図7に示す。そのほとんどはダヒワディ川に沿って分布している。井戸の深さは5.5mから深いもので約20mのものまでであるが、ほとんどは7~10mの深さである。浅層地下水を水源とした開放井戸で、管井戸はない。かつての井戸灌漑の様式は、牛で引き綱をひいて汲み上げるモート (mot) 式であった。この種の井戸は現在ほとんど見当たらない。揚水用のディーゼルポンプは、1964年以前にはわずか4台しかなかったが、1970年代に入ると、その数は急激に増加して70年代前半に14台、同後半に4台、80年代前半に17台、同後半に13台が設置された (表9)。この村に電灯線が引かれたのは本集落が1974年、新集落が1979年であり、これを利用して灌漑用の電動ポンプが導入されたが、その数は1970年代にはまだ少なかった。ところが、1980年代後半に村内各所に電線が架設されたこともあって、ディーゼルポンプから電動ポンプへの切り替えが行われ、新設も含めてその数は38台にもものぼった。これらのポンプはほとんどが5 H.P. であり、他に10H.P. と15H.P. のものが1台ずつある。

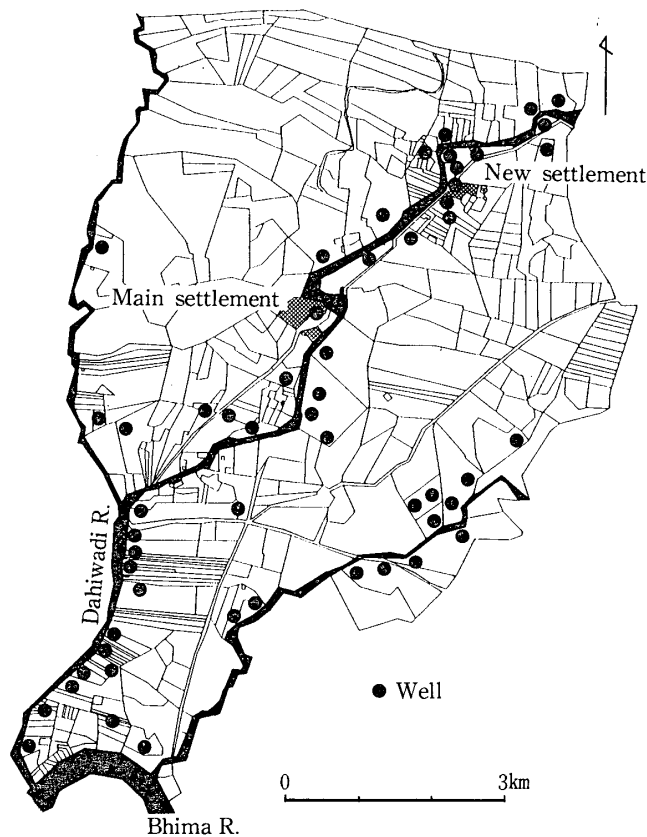


図7 ダヒワディ村の灌漑井戸の分布
Fig. 7 Distribution of wells for irrigation in Dahiwadi

表 9 ダヒワディ村における灌漑新技法の導入

Table 9 Introduction of new techniques for irrigation in Dahiwadi

| | 社会集団 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | 不明 |
|--------------------------------------|---------|---|---|---|---|----|---|---|---|---|----|----|
| 井戸 開 発 | －1969 | 2 | 3 | 2 | 1 | 1 | 3 | 1 | 0 | 1 | 6 | 0 |
| | 1970－74 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 | 0 | 0 | 0 | 2 | 4 | 1 |
| | 1975－79 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| | 1980－84 | 3 | 1 | 0 | 1 | 4 | 1 | 0 | 0 | 0 | 5 | 8 |
| | 1985－90 | 1 | 1 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| | 計 | 6 | 5 | 2 | 2 | 10 | 6 | 1 | 0 | 3 | 16 | 14 |
| デ ィ ー ゼ ル ポ ン プ | －1969 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 |
| | 1970－74 | 2 | 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 0 | 2 | 2 | 8 | 0 |
| | 1975－79 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 |
| | 1980－84 | 2 | 2 | 0 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2 | 7 |
| | 1985－90 | 2 | 0 | 0 | 0 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 |
| | 計 | 6 | 2 | 1 | 2 | 9 | 3 | 1 | 2 | 3 | 14 | 12 |
| 電 動 ポ ン プ | －1969 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 1970－74 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 0 |
| | 1975－79 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 |
| | 1980－84 | 4 | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| | 1985－90 | 1 | 1 | 0 | 1 | 8 | 5 | 1 | 0 | 2 | 7 | 12 |
| | 計 | 5 | 4 | 1 | 1 | 8 | 6 | 1 | 0 | 3 | 15 | 12 |
| パ イ プ ラ イ ン | －1969 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 1970－74 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 1975－79 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 |
| | 1980－84 | 2 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 3 | 1 |
| | 1985－90 | 3 | 1 | 1 | 0 | 4 | 2 | 0 | 0 | 0 | 6 | 6 |
| | 計 | 5 | 2 | 1 | 0 | 5 | 4 | 1 | 0 | 0 | 11 | 7 |

さらに、以上の動力ポンプの導入とともに、耕地へ配水するために塩化ビニール・パイプが1970年代後半から使用されるようになった。このパイプラインの敷設によって灌漑区域はさらに拡大し、これまで放牧にしか利用できなかった傾斜地や台地の上にまで配水できるようになった。

こうした灌漑耕地の開発過程を具体的に示したのが図8である。これは新集落近くの傾斜地の開発の例である。ここでは、以前からダヒワディ川に沿う緩傾斜地の部分で耕作が行われていて、斜面の中程に等高線状に石垣を築いて、上下の耕地の傾斜を緩くしていた。この石垣がいつごろ作られたものかは、村人にも記憶がないようである。この耕地の一部には1970年以前、川からディーゼルポンプによって直接揚水して、灌漑していたといわれる。この古い傾斜畑の上方に、同じように石垣を等高線状に築いて階段状の耕地を造成したのは、1971～73年である。石垣は低いもので30cm、高いのは100～150cmもある。1983年から1985年にかけて、さらに上方の傾斜地で耕地の造成が行われ、道路から約18mも高い地点まで石垣を築いて耕地化されている。これより上方は急傾斜になるため、耕地

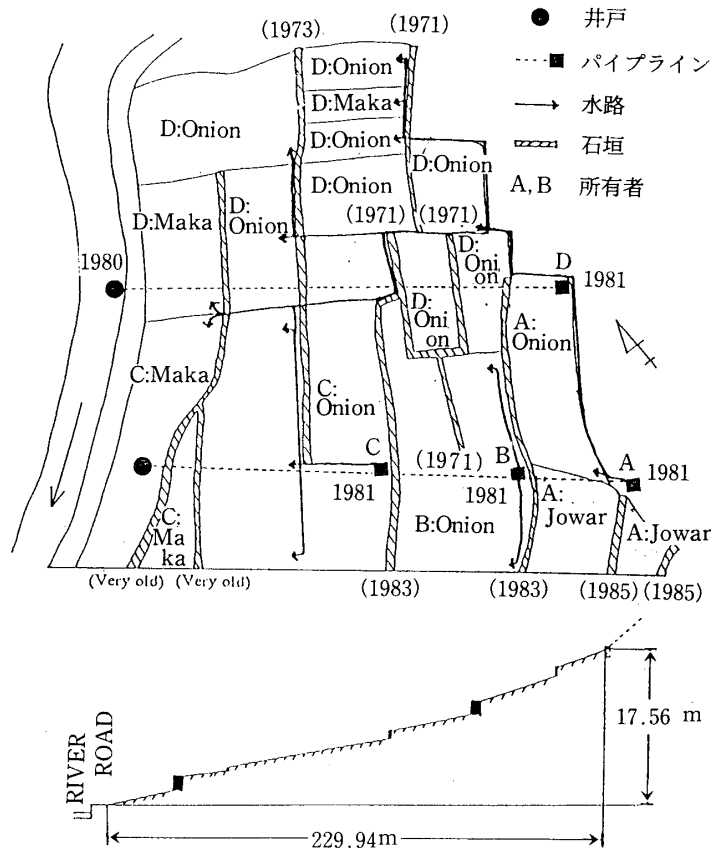


図8 送水パイプによる傾斜地の灌漑
 Fig. 8 Expansion of irrigated farms by water pipe on the slope

化はほぼ限界まで達しているといえよう。こうした造成耕地の灌漑のために、1980年に2つの井戸が掘削された。そのうちの一つは河床近くであり、川水が流れているときは、それを井戸に引き込んで利用できるようにしている。そして翌年、電気ポンプとパイプラインを設置して、高位の地点に設置した貯水槽まで水を揚げ、そこから自然流下式で耕地に配水できるようにした。揚水用のポンプとパイプは数戸の共用であるが、貯水槽は個人所有であり、したがって耕地への灌漑は個別に行うことができる。図8に示されているように、灌漑耕地にはタマネギ・トウモロコシ (maka) など商品性の高い作物が栽培されている。

3. 換金作物の導入と家畜飼養

以上の事例にみられるように、揚水灌漑はかなりの投資と労力を必要とし、経営的にも相当なリスクをはらむものであるが、商品作物の導入によって天水依存の自給的農業から少しでも脱却しようとする村人達の意欲の表れともいえよう。表10は地税(土地)台帳か

表10 ダヒワディ村における作付状況 (1989-90)

Table 10 Net irrigated and unirrigated areas sown in Dahiawadi, 1989-90

| 作 目 | 灌 溉 | 非灌漑 | 合 計 |
|-------------------|--------|--------|---------|
| コムギ (Wheat) | 7.53 | — | 7.53 |
| モロコシ (Jowar) | 195.90 | 46.77 | 242.67 |
| トウジンビエ (Bajra) | 3.19 | 160.50 | 163.69 |
| トウモロコシ (Maka) | 2.14 | — | 2.14 |
| ホースグラム (Hulga) | 0.03 | 10.88 | 10.91 |
| アオアズキ (Mung) | — | 3.88 | 3.88 |
| ヒヨコマメ (Gram) | 1.65 | — | 1.65 |
| インゲンマメ (Mataki) | 0.80 | 1.41 | 2.21 |
| ラッカセイ (Groundnut) | — | 0.80 | 0.80 |
| ベニバナ (Karadi) | 15.37 | 3.56 | 18.93 |
| 飼料 (Grass) | 1.88 | 2.62 | 4.50 |
| ナス (Brinjal) | 0.26 | — | 0.26 |
| タマネギ (Kanda) | 54.96 | — | 54.96 |
| 野菜 | 2.37 | — | 2.37 |
| オレンジ (Orange) | 7.45 | — | 7.45 |
| レモン (Lomon) | 1.60 | — | 1.60 |
| トウガラシ (Chiri) | 1.45 | 0.01 | 1.46 |
| 計 | 296.57 | 230.43 | 525.54 |
| (%) | (56.4) | (43.6) | (100.0) |

(土地台帳より作成, 単位 ha)

ら作成した1989-90年の灌漑地・非灌漑地別の作物作付状況である。1989-90年の南西モンスーンは比較的順調であったので、この作付はほぼ平年の状況を示しているといえる。作付総面積525.5haのうちの56.4%が灌漑地であり、最近10年余りの灌漑の進展をうかがわせる。作付作物では主食用のモロコシ (242.67ha)、トウジンビエ (163.69ha) が依然として大きな割合を占め、両者合わせて全作付面積の77.4%となっている。非灌漑地では、その約70%に乾燥に耐えるトウジンビエが作付けされており、他に目立つのはホースグラムにすぎない。

一方灌漑地では、その66.1%にモロコシ、15.8%にタマネギ、5.2%にベニバナが作付されている。こうした作物が選ばれた理由は、例えばタマネギについては保存がきくことを前にあげたが、表11に示すように、単位面積当りの農場での純収益および水単位当りの収益性が数ある商品作物の中でもっとも高い点を指摘できる。カリフ作の灌漑作物として単位面積当りの収益性がもっとも高いのはサトウキビであるが、水単位でみると、はなはだ効率が悪い。これに比較すると、モロコシの高収量品種の収益性は単位面積当りではラッカセイや綿花にやや劣るが、水単位でははるかに優っている。頻繁に干ばつに見舞われるうえ、灌漑水の供給能力がいちじるしく小さいダヒワディ村においては、栽培作物の選定には水単位当りの収益性がもっとも重視されるであろう。この村の農民たちにとっ

表11 作目別水要求量および収益性 (1978-1979)

Table 11 Water requirement and income per water unit by crop

| Crop | Water requirement (acre-inch) | Net farm business income per acre (Rs.) | Net farm business income per Mcft. of water (Rs.) |
|---------------------------|----------------------------------|--|--|
| Sugarcane (18 months) | 175 | 1,515 | 2,348 |
| Sugarcane (12 months) | 136 | 1,195 | 2,390 |
| Bajra (HYV-kharif) | 20 | 441 | 6,086 |
| Bajra (local) | 20 | 251 | 3,464 |
| Groundnut (HYV-kharif) | 24 | 525 | 3,464 |
| Groundnut (local-kharif) | 24 | 340 | 6,038 |
| Cotton (HYV-kharif) | 24 | 649 | 7,463 |
| Maize (local-kharif) | 20 | 435 | 6,003 |
| Jowar (HYV-kharif) | 15 | 485 | 8,924 |
| Jowar (local-rabi) | 22 | 317 | 3,962 |
| Onion (rabi) | 36 | 1,060 | 8,109 |
| Gram (local) | 18 | 290 | 4,437 |
| Onion (Hot weather) | 42 | 1,060 | 6,943 |
| Maize (Hot weather) | 36 | 435 | 3,328 |
| Cotton L.S. (Hot weather) | 42 | 760 | 4,978 |
| Groundnut (Hot weather) | 36 | 485 | 3,710 |

(N. Rath and K. Mitra, 1988 より)

て、灌漑水は個人負担によって開発した高価なものであり、またその量は決して多くはないので、彼らの水管理はきわめて細心かつ効果的である。大規模灌漑地域の農民にみられる水の浪費は、ここではまったく見られない。最近はまだ、資金のある農民は、資本の懐妊機関が長くリスクは大きい、一定の収入を長期的に期待できるオレンジ・レモンなどの樹園地経営も手掛けられるようになってきた。

最後に、家畜の飼育状況についてみる(表12)。ウシ(ゼブウシ・水牛)の総頭数は343頭(1世帯平均2.6頭)、羊・山羊の総頭数は690頭(1世帯平均5.2頭)である。羊・山羊飼育を伝統的生業としていたダンガー世帯が多いだけあって、羊と山羊の数が多(1世帯当り14.3頭)。ウシの大部分はマラータ・ダンガー・ブラーミンの3ジャーティによって所有され、1世帯当りの所有はそれぞれ2.9, 3.2, 4.0頭となっている。これにマトングの2.8頭、ジョシーの2.3頭、ロハールの2.0頭が続く。牝のゼブウシが比較的多く飼育されている。牝のゼブウシは2頭1組で耕起や牛車に使役されるが、そうしてみるとマラータの旧住民は2世帯で1組、新住民やブラーマン・ダンガーではだいたい1世帯に1組の割合で所有していることになる。傾斜畑や悪路の多いダヒワディ村においては、ゼブウシはまだ欠かせない存在といえよう。牝水牛の大部分は新集落マラータ住民によって飼育さ

表12 ダヒワディ村におけるジャーティ別家畜飼養
Table 12 Livestocks by Jati in Dahiwadi

| Jati | Cow | | | Buffalow | | | Cow & buffalow | | Sheep & Goat | |
|----------|-----|-----|-----|----------|----|----|----------------|--------|--------------|--------|
| | M | F | T | M | F | T | Total | Per HH | Total | Per HH |
| Maratha | 89 | 102 | 191 | 0 | 21 | 21 | 212 | 2.9 | 192 | 4.0 |
| Ordinary | 42 | 60 | 104 | 0 | 3 | 3 | 107 | 2.4 | 263 | 5.8 |
| Newcomer | 47 | 42 | 87 | 0 | 18 | 18 | 105 | 3.8 | 29 | 1.0 |
| Dhanger | 37 | 43 | 80 | 0 | 3 | 3 | 83 | 3.2 | 371 | 14.3 |
| Brahmin | 8 | 6 | 14 | 2 | 0 | 2 | 16 | 4.0 | 0 | 0.0 |
| Matang | 2 | 7 | 9 | 1 | 1 | 2 | 11 | 2.8 | 16 | 4.0 |
| Joshj | 2 | 2 | 4 | 0 | 3 | 3 | 7 | 2.3 | 2 | 0.7 |
| Mahar | 0 | 1 | 1 | 2 | 0 | 2 | 16 | 4.0 | 0 | 0.0 |
| Others | 2 | 8 | 10 | 3 | 0 | 3 | 13 | 0.7 | 6 | 0.4 |
| Total | 140 | 169 | 309 | 6 | 28 | 34 | 343 | 2.6 | 690 | 5.2 |

(1990年全世帯悉皆調査より作成、土地規模の単位は頭)

れているが、これは前述したように販売用の生乳生産を試みた名残りである。

図9は社会集団別にみた土地所有およびウシ飼養の状況である。全般的にみると、土地所有面積とウシ飼養頭数との間には正の関係が認められる。10ha以上を所有する大規模農は15世帯あるが、飼養するウシは主として耕作用の牡牛で、搾乳用牝牛の多頭飼育は生乳販売ができないために存在しない。また、ブラーマン世帯（Cグループ）は自分で土地を耕すことが稀であるため、耕起用の牡牛は少なく、搾乳用の牝牛も自家消費に足りる程度である。このため、図9においてはCグループ世帯は土地所有－ウシ飼育関係を示す陰

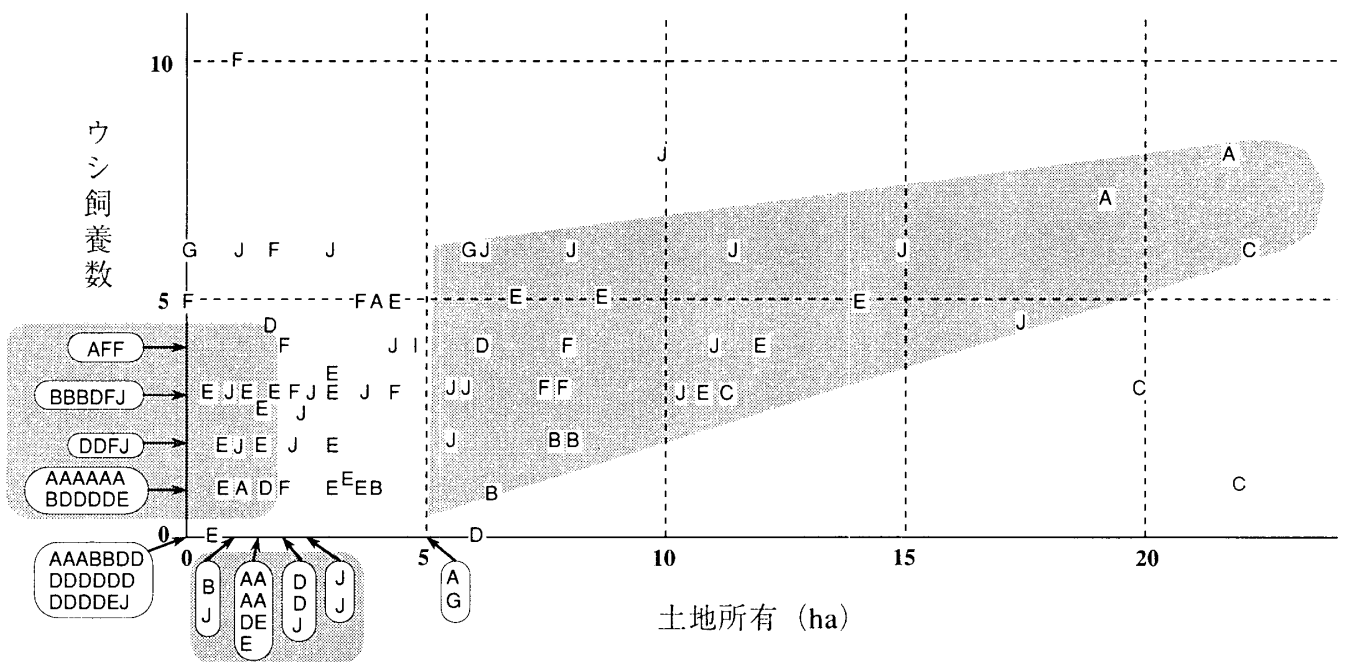


図9 社会集団別にみた土地所有規模と飼養家畜数との関係

Fig. 9 Relationships between landholding size and livestock numbers by social group

影部分の下縁付近に分布している。土地所有が2.5ha以下になると、上述の土地所有－ウシ飼養関係は不明瞭になってくる。ウシを全く飼っていない小規模農・限界農の数は16世帯、土地なし・ウシなし世帯が20世帯を数えるが、そのうち15世帯がDグループ、8世帯がAグループ、3世帯がBグループに属し、ほとんどが本集落に住む世帯である。一方、土地なしでウシを飼養している世帯は27あり、そのうち1頭だけ飼育している12の場合はすべて搾乳用の牝牛であり、1世帯を除いてすべて本集落居住のAグループとDグループである。この中には、政府のIRDP（総合農村開発計画）の補助金を受けて、搾乳用のウシを飼うようになった世帯が多く含まれている⁸⁾。土地なし世帯で3頭以上の飼育となると、搾乳用のウシのほかに耕作用の一組の牡牛を飼うケースがみられる。それはBおよびFグループ、つまりダンガーの世帯に目立つ。個々に確認していないが、耕作用の牡牛を連れて他人の土地を賃耕しているものと思われる。

V. 新住民集団の自己革新と村の発展

灌漑耕地の拡大や商品作物の導入などにみられるように、ダヒワディ村の最近の変化の中で新集落マラータ住民の開発に対する積極的姿勢が目立つ。1964年以前に導入されていた4台のディーゼルポンプは、ブラーマン、マラータの新旧住民とマタングによって各1台が所有されていたが、1970～74年に導入された14台の中の8台は、新集落のマラータ農民の所有であった。また、電動ポンプについても、1970～74年の5台の中の4台までが彼らによって導入された。さらにまた、パイプライン（2本）を1975～79年に初めて設置したのも彼らであった。このことは、彼らの所有する耕地が傾斜地や台地の上になかったという事情にもよるが、多くの資金と労力を払ってもそれを克服しようとする彼らの積極的な姿勢によるところが大きい。彼らは傾斜地の耕地化のための石積みや灌漑井戸の掘削など、比較的多くの労力を要する事業については相互に協力し合っており、またポンプ・パイプラインなどの購入資金の工面も彼らの集団内部で処理している。こうした相互扶助は生活面でも常時行われており、前述した棟割長屋風の住宅建設、自前での電化や小学校建設がその良い例である。このような相互扶助の精神は、彼らがダヒワディ村に移住した時以来、強めてきた地縁・血縁の結びつきに根ざすものであるが、それを育て指導してきた有能な人物の存在も無視できないといわれる。

しかし、これを逆説的にみれば、彼らにそのような行動をとらせたダヒワディの村落社会の構造そのものについても検討する必要がある。彼らが入植してきたのは、典型的なブラーマン地主支配の村であったが、その中で彼らがどのように扱われてきたかについては、これを明らかにする資料はない。

南埜 猛 他：ジャーティ集団の接触と自己革新によって低開発性の脱却を図る村・ダヒワディ

土地改革の後、農地の大部分を失ったブラーマン層は経済的基盤とともに、村内における社会的・政治的指導力も弱めてしまった。こうした旧地主に代って村落社会の指導層として現れるのは一般的にいえば、村落内有力ジャーティのうち、土地改革によって自立した中農層であり、彼らを中心にして村パンチャーヤトは順調に運営されている例が多い。ダヒワディ村の場合、新しい指導層として期待されるべきは旧住民の中で土地資産を得たマラータ（社会集団のAグループ）とダンガー（同じくBグループ）のはずであるが、彼らはこの期待に応えられるほど順調に成長しなかったように思われる。そのため、村パンチャーヤトを中心とする村落の自治機能が良好に働いておらず、したがって政府関係の開発事業や資金を導入する機会が少なかったといえる。それは、貯水池堰堤の補修、道路の整備、各種公共施設（学校・診療所等）の設置についての政府への要望が、村意がまとまらないままに遅れ、未だに実現できずにいるという事実によっても知ることができる。このような村パンチャーヤトの運営に対して、新集落のマラータ農民（Jグループ）はたえず不満をもち、村の発展に危機感すら抱いていたといわれる。上述した開発に対する彼らの積極的な姿勢は、こうした村政に対する不満・不安に根ざすものであり、彼らは村パンチャーヤトに依存することなく、自己の才覚で農業経営を拡大しようとしてきたといえる。

一方、このような新集落のマラータ農民の自己革新的な行動に対して、旧住民はどのような姿勢をとってきたのであろうか。動力ポンプ（ディーゼル・電動）とパイプラインによる灌漑耕地の拡大および商品作物の栽培がJグループ農民によって先鞭をつけられると、他の社会集団の中にもこれを見習うものがでてきた。例えば、パイプラインの敷設は1975～79年に初めてJグループ農民によって行われたが、1980～85年にはこれを見習ってA、Fグループで各2件、B、F、Gグループで各1件の新設が行われている。同期には、Jグループでは2件が追加されている（表9）。なお注目されるのは、本集落に居住する1戸のブラーマン（Cグループ）が新技術を初期段階から導入していることであり、彼らも豊富な自己資本を生かして農業経営の刷新に一部参加してきたことがうかがわれる。

以上のように、Jグループの自己革新的な行動は、よい意味で他の社会集団（旧住民）に対する刺激となり、村の経済発展に一つの契機を与えてきたといえる。換言すれば、社会集団間の接触、学習の効果が相乗的に作用して村落社会を向上させてきたといえる。しかし反面、Jグループ内部の堅い結束がかえって旧住民との融和を妨げ、彼らをダヒワディの村落社会の中で孤立させる結果にもなっていることにも注意する必要がある。新・旧住民の協力体制が必ずしも良好に保たれていないのが現状である。

さらにまた、土地改革によって土地を手にした農民層自体も、井戸灌漑や商品作物の導入を通して分解が進んでいる。すなわち、川水や地下水を得やすい場所に耕地を所有する

農家はきそってタマネギ・トマトなどを導入し、さらに資金力のある者は、資本の懐妊期間が長く、したがってリスクも大きいですが、一定の収入を長期的に確保できるオレンジ・レモンなどの永年樹木作を中心とする樹園地経営に乗り出している。こうした商品作物生産の導入によって、土地を持たない階層や限界農・小規模農の労働力が村内において吸収されている側面があるが、同時進行的に村民間の経済格差が強まっており、この村の発展の新たな課題として浮かび上がってくるものと予想される。

VI. 結 論

インドの農村は一般に、独立以来一貫して人口を増加させ、最近になってようやくそのテンポを緩めている。ところが、ダヒワディ村の人口増加はこれとはかなり異なった傾向を示し、増加傾向に移ったのは1971年以降であって、特に1981年から急激な増加をみせている。これは、この村の経済発展がインド一般の農村に比べて、かなり立ち遅れていることを象徴的に表しているものといえる。実感としても集落景観や村人の生活をみただけで、この村の貧しさを読み取ることができる。

ダヒワディ村は、降水量が年平均500mm前後と少ない上に、年による変化がきわめて大きい。村の中央をダヒワディ川が流れるものの、干ばつの時には涸れてしまい、干ばつ被害の軽減にほとんど用をなしてこなかった。そうした不利な自然条件のほかに、郡役所があるシルールの町や主要道路に至る道路が整備されてこなかったことも、この村の農業発展を阻害してきた要因といえる。

ダヒワディ村は長い間、土地の大半を所有する少数のブラーマン地主によって支配され、その下で生活する多数のマラータ・ダンガーの自小作民および各種職人・サーヴィス層によって構成されてきた。そうした地主支配村の中に、1920年代にマラータ新住民が地主の土地を購入して移り住んだが、彼らは独特のバスティを形成し在来の旧住民とはかなり異なった行動をとってきた。

独立後の土地改革によって、ブラーマン地主は土地の多くを失ったが、現在なお、ブラーマン4世帯だけで村の全耕地の11.4%を確保している。彼らの中には、最近では家畜を飼い灌漑井戸を掘って農業経営に身を入れる者もでてきたが、家族構成員の中に村外で教師・官吏等の職についている者が多く、村の発展に大きな影響力を保っているとはいえない。一方、新たに土地を得たマラータ・ダンガー農民も、この村の自然的ならびに市場条件の劣悪性のために農業経営を向上させることは容易でなく、したがって、先進的農業地域にみられるような、経営基盤をある程度確立した中農層の形成は進行していない。このため、旧地主層に代わるべき新しい村落社会の指導層の成長が遅れており、村パンチャーヤトも

南 楚 猛 他：ジャーティ集団の接触と自己革新によって低開発性の脱却を図る村・ダヒワディ

適切に運営されているとはいいがたい状態である。インド一般の村にとって、政府関係の開発事業や資金をいかにして多く導入するかは発展への決め手であるが、この村の場合、村意がまとまらないままに開発資金の導入が遅れることが多かった。貯水池堰堤の未補修、道路整備の遅れ、各種公共施設の設置の遅れ等がそれである。

そうした村政の実態に不満をもち、村の発展に危機感すら抱いていたのは新集落のマラータ農民（Jグループ）である。彼らは村パンチャヤトを当てにせずに、彼ら独自でいろいろな事業の導入を積極的に試みた。最初に試みたのは、自給的な農業の枠組みから脱するために行った搾乳用のウシの飼育と生乳の販売である。これは道路事情が悪いため失敗するが、それに懲りず井戸灌漑を積極的に進めてタマネギやトマトなどの商品作物の栽培をはじめた。井戸灌漑の揚水には最初ディーゼルポンプが用いられ、ついで電動ポンプに切り替えられたが、それらの新技術ないし新方式の導入に先鞭をつけたのは、つねにJグループの農民であった。さらに、パイプラインによる配水システムを採用して、斜面地や台地の上にまで灌漑耕地を拡大させた。彼らの積極的な農業経営に刺激されて、旧住民の中にも井戸灌漑とタマネギ栽培を行う者が多くなってきた。その結果、1989-90年現在、灌漑耕地への作物作付は296.57haとなり、非灌漑耕地のそれを上回るほどになっている。灌漑耕地の作付割合はモロコシ66.1%、タマネギ18.5%、ベニバナ5.2%の順となっており、ダヒワディ村の農業活動は投入基準、産出基準のいずれでみても集約化に向かいつつあるといえる。

しかしながら、それは緒についたばかりであり、これを村の発展に確実につなげていくためには、商品作物の生産から販売に至る協業体制の確立、懸案の道路の整備、地下水の効率的利用法の考案など、村民が一致して取り組まなければならない課題が山積している。特に、ダヒワディ川流域における地下水量は限られており、例えば1985-87年干ばつの時に飲料水にも事欠くほどであったように、現在進めている井戸灌漑そのものも相当高いリスクをはらんでいる。また、灌漑耕地の整備に投入された資金はかなりのものであり、農民がそれを償却し安定した経営基盤を確立するまでには、なお多くの時日を必要とするであろう。さらにまた、村人の半数以上が土地なし農民（農業労働者）、限界農、職人・サービス業など経済的貧困層であるが、彼らの生活を保障し向上させていくはずのDPAP（干ばつ常習地域計画）やIRDP（総合農村開発計画）といった政府開発事業の恩恵は、家畜飼養の増加を除いて、彼らにほとんど及んでいない。この村が貧困から離脱するためには、村パンチャーヤトを中心とした村人の創意と協調が不可欠である。

（本稿の概要は、1991年度日本地理学会春季学術大会において発表した。）

注

- 1) ダヒワディ村が属するシルール郡は、1970年に開始された干ばつ常習地域計画 (DPAP) の対象地域となっている。同計画の地域認定の基準は、①年降水量とその変動率、②過去の干ばつ被害の状況の自然的要因のほかに、③県単位での灌漑の進捗、④租税の減免状況などが勘案された。
- 2) この土地は、徴税官が妹にダウリ (持参金) として与えた土地の一部、約100エーカーといわれる。場所は、マラータ新住民が現在住んでいる村域の北東部の一帯である。
- 3) 表4では女性の就業者数が、男性のそれに近い値となっている。これは、女性労働力を必要とするタマネギやレモンの栽培が盛んなためでもあるが、世帯調査の際の女性就業者の認定に不備があったことも原因している。したがって、これを除外して考察する。
- 4) これは非灌漑耕地の場合であって、灌漑耕地については井戸灌漑の場合が11エーカー、用水路灌漑の場合が18エーカーである。これを超過する分については政府が買い上げたうえ、土地を有していない農業従事者に配分する旨、明文化されている。
- 5) この数値は、前世帯の聞き取り調査を単純集計したものであり、土地台帳その他によるクロスチェックを行っていない。村人は一般に自己の所有地を少な目に答えることが多く、したがって、この数値は表1の耕地面積よりかなり少なくなっている。表6～8を読む際には、このことを念頭においてもらいたい。
- 6) 農村総合開発計画 (IRDP) では、計画対象世帯を限界農 (1.0ha 以下) ・小規模農 (1.0～2.0ha) ・農業労働者 ・農外 (一般) 労働者 ・村落職人 ・指定カースト ・指定ドライブおよび年収3,500Rs 未満の家族5人以上の家庭と規定している。
- 7) 補修は州政府の仕事であるが、なぜ放置されているかについて村人に尋ねたが、満足な説明が得られなかった。費用負担とか用水費の支払いとか、補修に当たって州政府が提示した条件に村民の意見がまとまらなかった、という事情があったようである。なお、灌漑面積が250エーカー (101.17ha) までの小規模灌漑は Zilla Parishad (県開発局) の公共事業費で施工される。
- 8) 政府は零細規模の農民や土地なしの農業労働者 ・職人等に補助金を与えて、搾乳用の牝牛や牝水牛 ・山羊の飼育を奨励している。このため、全インドの1972～1982年における家畜飼養数は、牝牛 ・牝水牛については減少傾向にあるが、牝牛 (3歳以上) は5640万頭から5870万頭へ、牝水牛は2920万頭から3240万頭へ、さらに山羊は6750万頭から9530万頭へと増加している。IRDP (総合農村開発計画) が本格化した1980年代にはこの増加はいつそうピッチをあげている。



写真1 村内を流れるダヒワディ川。揚水灌漑用の池が流路脇に掘られている。
Photo. 1 Pond for pump irrigation beside Dahiwadi water course



写真2 マラータ新住民の集団住宅 (バスティ)
Photo. 2 Aggregative houses (basti) of Marhata new comers

南埜 猛 他：ジャーティ集団の接触と自己革新によって低開発性の脱却を図る村・ダヒワディ



写真3 たまねぎを移植中の女子農業労働者
Photo. 3 Female agricultural labourers under
transplanting of onions

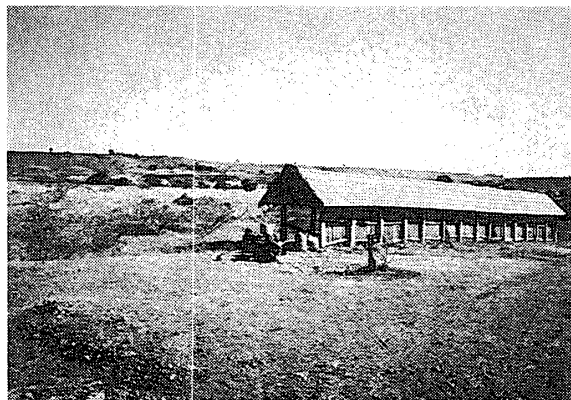


写真4 タマネギの共同選果場
Photo. 4 Community hut for concentration and
deposition of onions